



Rebecca Soderholm



Sandy Alpert

01 | 米国で公募、世界の 写真家の眼差し

Project Bashoフォトコンペ受賞作品展 「ONWARD」

米国でも写真家を目指す人は多い。伊藤剛さんは8年ほど前からフィラデルフィアで写真センターを運営し、そうしたアマチュアたちを育成してきた。このほど彼が主催するフォトコンペの優秀作品展がリコーリングキューブで開催される。

8年前から、フィラデルフィアで運営している写真センター

アメリカには、商業カメラマンとは別に、自分の写真制作をライフワークとする人たちが大勢いる。そのため各州ごとに写真センターと呼ばれる写真の複合施設がある。

伊藤さんが運営する写真センター「Project Basho」は、築90年ほどの倉庫スペースに、ギャラリー、暗室、コンピュータールームなどを持ち、「写真にまつわる様々なこと」を提供している。初心者向けの一眼レフ入門教室から、大判カメラ、スタジオライティング、古典印画法などなど。そのほか写真家やキュレーターなどを招いた写真ワークショップも定期的に開催。

受講者のメインターゲットは、写真作家を目指す社会人たちで、魅力的なプログラムには全米から人が集まるといふ。彼らが重視するのは作家としてのキャリアをどう作っていくかで、公募型のフォトコンペに参加することも大事な足がかりの一つだ。

4年前から始めた写真公募展「ONWARD」は毎年、審査員を変え、メディアアスポンサーを増やして徐々に規模を広げてきた。今年の審査は写真家のラリー・フィンク氏だ。

「応募作品は世界各地から集まり、約600名の2300点ほど。米国外は15%程度で、そのうち30名が日本人。」





右上：Akihiro Furuta
 左上：Rebecca Soderholm
 左中：Dina Litovsky
 左下：Joey Cardella



■ Project Basho フォトコンペ受賞作品展「ONWARD」
 5月4日(水)～22日(日)
 リコー・リングキューブギャラリーにて開催



ギャラリーは兼用のスペースと利用され、他にもレクチャーやワークショップも開かれ人が集まれる様になっている。右上はONWARDの展示の一部。



町の中心部から地下鉄で10分ほど離れた場所に位置し、昔の2階建ての倉庫を改装した「Project Basho」のスタジオ外観。

日本語の応募票を制作したので、今年は急増しました」

アメリカでは出力メディア自体が何かはあまり重視していないという。4×5判フィルムで撮影しインクジェット出力する人もいれば、デジタルネガを起こしてプラチナプリントを作る人もいる。

「単純にアナログか、デジタルかなんて分けられない。最終的に写真、形になった時のメッセージ性、力を持っているかが重要です」

伊藤さんは、日本から出たくてアメリカに留学し、卒業後、現像所に勤めた。深く暗室技法を学ぼうと思った時、フィラデルフィアにはそうした施設がなく、ニューヨークのICPに通

った後、この写真センターを立ち上げたのだ。

今は日本の写真関係者との交流などで、日米間を行き来する。2年前には能登の文化に興味を持ち、受講生を連れて撮影ツアーも行なった。外に出て、伊藤さん自身、日本を再発見したのだろう。

「知ったつもりになっているが、この2国間ではあまり情報が流通されていないことに気づいた」と伊藤さん。5月4日からリコーリングキューブで開催されるフォトコンペ受賞作品展「ONWARD」ではアメリカで今、写真作家を目指す人が何を考え、模索しているかが分かる。そこではきつと新鮮な驚きがあるはずだ。

伊藤 剛 [いとう・つよし]

1974年生まれ。テンブル大学日本校に入学後、96年よりフィラデルフィアの本校に留学。卒業後、現像所勤務を経て、2002年より自宅アパートを使って暗室ワークショップを開講。その後、写真センターProject Bashoを創設。http://www.projectbasho.org/。